

が、建築予算一千万円以下とい  
う条件で、設計を公募し、百十  
七件の応募作から選ばれたのが  
民Experiment、TE  
北海道の建築家・五十嵐淳によ  
るこの建築プランだった。関  
西に拠点を置くダンスシアター



# 青春の「尊さ」伝える

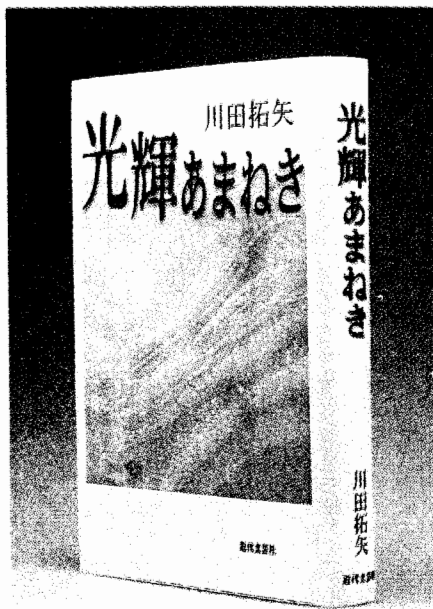
川田拓矢著「光輝あまねき」

笹田 隆志

## 書評

青春は「立派」なもの

ではないが、「尊い」ものである。その価値は計り知れない。夢幻を追う体質の尊さを知る時期にそれを知



るべく没頭してほしいと「光輝あまねき」の著者・川田拓矢は読者にメッセージをよせる。

川田拓矢は中学のとき野辺地町に住み、青森高校に在学したこともあるだけに陸奥湾の潮騒がしみついた作家である。その彼はかつて群像新人賞候補にもなっただけあって、六百七十枚のこの小説でも、まったく破綻（はたん）のない緻密（ちみつ）な文章で読者を

# 文化

ページは、背広姿のサラリーマンや不良中年、カジュアルな格好をした学生らが雑然と居並ぶ、ありふれた都会の路上の光景に変わる。背丈もばらばら。れば踊るほど、客席からは笑い

場人物は、そのほとんどが早稲田の学生であり、青春の真ただ中であって将来に対する希望と不安をもてあまして揺れ動いている。志望は期待であり、夢でもあり、それはまだ現実とはならない。懼（おそ）れという立ちの日々を友情と愛がちなぎとめる。

三十五年前にタイムスリップさせてくれる。いや、川田は私のような同時代の人間にこの本を読んでもらいたいのではなく、今まさに青春のさなかにある若者に熱いメッセージを送っているのだ。

この小説に登場する南海薫を中心とする十人余の登場人物は、そのほとんどが潮騒をかぎとったのは、主人公南海薫が北海道の厚岸出身で、同棲（どうせい）していた恋人由紀子の故郷が岩手の雫石だからだ。二人の愛は、決して甘ったるいものではなく、嫌みのない抑制のきいた表現と描写で崇高となっている。知的で抒情（じょじょう）的な純愛小説に仕上がっていると感じさせられた。

（青森ペンクラブ監事・北狄）編集長、青森市

※川田拓矢さん（埼玉県）の「光輝あまねき」は近代文芸社（電話03・53395・1199）刊・二、一〇〇円。

今年の十月で図書券（正）発行は九〇年から。近年は式には全国共通図書券が図書券が減って図書カード

今年10月でなくなる図書券

式には全国共通図書券が図書券が減って図書カード  
なくなる。プリペイド式の図書カード（全国共通図書券）が増えている。といっても、昨年発行されたのに、億四千万円発行されたのに

## 女も



そういう学生は、仕送りがあると家賃と最低限の生活費以外はすべて図書券に換えてしまう人のうわさを聞いた。腹が減ったら五百円券で当皮新書を買